

大人の甘えを好ましく感じる要因の解明と甘えの関係性向上効果の日米韓比較

著者	新谷 優
ページ	1-4
発行年	2010-05
URL	http://hdl.handle.net/10114/7258

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 16 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2008～2009
課題番号：20830100
研究課題名（和文） 大人の甘えを好ましく感じる要因の解明と甘えの関係性向上効果の日米
韓比較
研究課題名（英文） Why people enjoy being asked for a favor: Amae as a catalyst of
interpersonal relationships in Japan, U.S., and Korea
研究代表者
新谷 優 (NIIYA YU)
法政大学・グローバル教養学部・助教
研究者番号：20511281

研究成果の概要（和文）：成人男女 1000 名に郵送調査を行った結果、大人の甘えに対して肯定的な態度をもつ人ほど、甘え場合において、関係の親しさとコントロール感を感じ、甘えをうれしく感じていた。また、実験でサクラが参加者に甘える条件と甘えない条件を設け、サクラに対する好意度や印象を実験の前後で測定したところ、日米両国において、甘え条件でのみ、サクラに対する好意と印象が高まった。以上の結果から、甘えは対人関係を促進することがわかった。

研究成果の概要（英文）：A random sampling survey of 1000 adults showed that seeing adult's Amae positively was associated with perceiving closer relationships, feeling more control, and feeling greater positive affects in Amae situations. In an experiment, participants in both the U.S. and Japan increased liking of a confederate who asked them a favor (Amae) but not when the confederate did not ask the favor. Together, these studies show that adult's Amae can enhance relationships.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合 計
2008 年度	1, 190, 000	357, 000	1, 547, 000
2009 年度	1, 200, 000	360, 000	1, 560, 000
年度			
年度			
年度			
総 計	2, 390, 000	717, 000	3, 107, 000

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：甘え、対人関係、文化比較、親しさ、コントロール感

1. 研究開始当初の背景
大人の甘えには、不適切な側面が必ず存在する（山口, 1999）にもかかわらず、大人の甘えは「対人関係の潤滑油」であり、関係性の向上をもたらすとも言われている。これまでの研究でも、人は場合によって大人の甘えを好ましく感じる事が明らかにされてきた。

例えば、日本人を対象にした質問紙実験では、「決して甘えない人」よりも「ときどき甘える人」の方が人に好かれ、人間関係が良好であると評価されており (Niiya, Yamaguchi, Murakami, & Harihara, 2001)、また、日本人・アメリカ人対象のシナリオ実験では、国籍にかかわらず、「友人が自分に甘えないシナリ

オ」よりも、「友人が自分に甘えるシナリオ」の方が好ましい感情を想起するという報告がある(Niiya, Ellsworth, & Yamaguchi, 2006)。

2. 研究の目的

本研究は、甘えがいかに関係性を向上させるかというメカニズムを解明することを目的とした。具体的には以下の3つを目的とした。

(1) 「甘える側」と「甘えられる側」が甘えを好ましく思う要因の検討: 「甘える側」も「甘えられる側」も、甘えを関係の親しさの証として捉えるほど、甘えを好ましく感じるという仮説を立てた。また、双方とも、自分がその状況をコントロールしていると感じるほど、甘えを好ましく感じると予測する。

(2) 甘えが関係性に与える影響の検討: 人に甘えられると、実際に相手に対する好意や親密度が増すか実験室実験で検討する。

(3) アメリカと韓国における甘えの対人関係モデルの検討: 「甘え」という言葉も概念も存在しないアメリカと韓国でも、甘えが対人関係を促進するか実験を行う。

3. 研究の方法

(1) 「甘える側」と「甘えられる側」が甘えを好ましく思う要因の検討

①調査対象者: 練馬区在住の20~69歳の有権者1000名を二段階抽出のランダムサンプリングで選び、郵送調査を行った。320名より有効な回答が得られた(回収率32%)。回答者の平均年齢は47.1歳($SD = 13.3$)であり、56%が女性であった。

②質問項目: まず、「最近、あなたが友人・知人に対して、「甘え」と考えられる行動をとったときのことを思い出してください」と教示し、その状況での感情(「うれしい」、「安心した」、「誇らしい」など10項目; $\alpha = .79$)、親しさの認知(「あなたはその友人・知人に親しさを感じましたか」など3項目; $\alpha = .82$)、コントロール感(「あなたは、そのとき、相手に甘えを受け入れさせるか自由に決められたと思いますか」1項目)を測定した。次に、「今度は、あなたの友人・知人があなたに対して「甘え」と考えられる行動をとってきたときのことを思い出してください」と教示し、上と同じように、その状況での感情($\alpha = .83$)、親しさの認知($\alpha = .86$)、コントロール感を測定した。大人の甘えに対する肯定的態度は「甘えは好ましい」、「甘えられることは好ましい」、「甘えたり、甘えられたりすることで、人間関係が円滑になる」、「社会で生きていくためには、人に甘えることも必要だ」の4項目で測定した($\alpha = .77$)。質問はすべて1~4のリカート尺度で回答を求めた。

(2) 甘えが関係性に与える影響の検討
人から甘えられることで対人関係が実際に促進されるか、日米で実験を行った。

①実験参加者: 日本人大学生41名(女性76%)とアメリカ人大学生42名(女性74%)が実験に参加した。参加者の平均年齢は、日本が20.1歳($SD = 1.68$)、アメリカは18.6歳($SD = .77$)であった。

②実験手続き: 参加者と参加者に扮した女性のサクラには、「他人の存在がパズルの作業効率に与える影響について調べている」と説明し、まず、互いの印象・親しみやすさ・好意度を評定させた。次に、パズル課題を説明し、参加者を初級パズルに、サクラを上級パズルに割り当て、参加者の方がサクラよりも先にパズルが終わる状況を作った。そこで、参加者をランダムに以下の2条件に分けた。「甘え条件」では、サクラが参加者に対し、パズルを手伝ってほしいと頼み、「甘えなし条件」では、実験者が参加者に対し、サクラのパズルを手伝うよう指示した。パズル終了後、参加者とサクラは、再び互いの印象・親しみやすさ・好意度を評定した。

③プリテストとポストテストの質問項目: サクラに対する好意は、「私は、この実験で一緒になった相手に対して、好ましい感情をもっている」、「私は、この実験で一緒になった相手と友だちになりたいと思う」など、5項目の平均を用いた($\alpha > .87$)。サクラから感じる好意は、「この実験で一緒になった相手は、私に対して好ましい感情を持っているのではないかと思う」など3項目の平均を用いた($\alpha > .93$)。サクラに対する印象は、相手の第一印象を「社交的」、「オープンな性格」、「人に好かれる」、「人間関係がうまくいく」といった描写がどの程度当てはまるか評定してもらった($\alpha > .84$)。いずれも1=全くあてはまらない、から9=とてもよくあてはまる、の9点尺度で回答を求めた。質問項目は日本語で作成し、バックトランスレーション法で英語版を作成した。

4. 研究成果

(1) 「甘える側」と「甘えられる側」が甘えを好ましく思う要因の検討

自分が友人・知人に甘えた場合と、友人・知人が自分に甘えた場合それぞれにおいて、甘えに対して肯定的な態度・関係の親しさの認知・コントロール感が、その状況でのうれしさを説明するか単回帰分析を行った。自分と友人、どちらの甘えの場合も、甘えに対して肯定的な態度をもつ人ほど、甘えをうれしく感じていた($\beta = .17$ と $.27$, $ps < .01$)。また、仮説どおり、親しさを感じ($\beta = .32$ と $.54$, $ps < .001$)、コントロール感がある人ほど($\beta = .38$ と $.35$, $ps < .001$)、自分と友人の甘えをうれし

く感じていた。

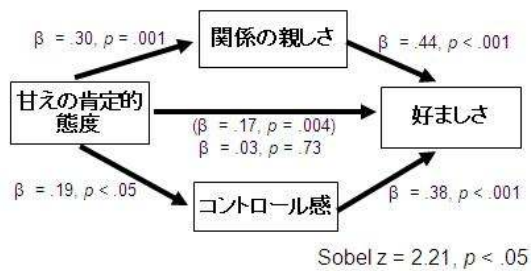


図1 自分が友人・知人に甘えたときのうれしさを説明する変数

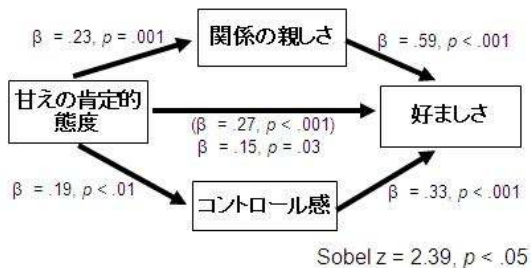


図2 友人・知人が自分に甘えたときのうれしさを説明する変数

次に、関係の親しさとコントロール感が甘えの肯定的態度からうれしさへのパスを媒介するか検定したところ、片方の媒介変数をいれた場合でも、両方の媒介変数をいれた場合でも、媒介モデルが成り立った(図1、2)。

以上の結果から、大人の甘えをうれしく感じるのは、甘えを肯定的に捉える傾向があるためであり、甘えにより、関係の親しさとコントロール感が感じられるためであることが明らかになった。甘えに対して肯定的な態度をもつ人ほど、関係の親しさを喚起するような甘え状況を思い出している点は、過去の研究と同様に、関係の親しさが甘えの好ましさを規定する重要な要素であることを示す。過去の研究と異なり、日本でもコントロール感が甘えのうれしさを規定するという結果が得られたのは、興味深い。「コントロール感」という日本人に馴染みのない概念を、「相手を受け入れるかどうか自由に決めること」として尋ねたためである可能性がある。今後もコントロール感を甘えの好ましさの要因として検討していく必要がある。

(2) 甘えが関係性に与える影響の検討

日米両国において、サクラに対する好意(図3)、サクラから感じる好意(図4)、サクラの好ましい印象(図5)が実験の前後で変化があったか調べた。いずれの従属変数も、実験の前後で増加がみられた($F_s(1, 79) >$

$10.0, p_s < .01$) が、実験条件との交互作用が有意となった($F_s(1, 79) > 6.0, p_s < .05$)。仮説どおり、サクラが参加者に甘える条件でのみ、実験の前後でサクラに対する好意、サクラから感じる好意、サクラに対する好印象が増加したが、サクラが甘えない条件では、これらの変数に変化は見られなかった。なお、文化との交互作用が見られなかった($F_s(1, 79) < .80, ns.$) ことから、サクラが甘えることで好意が高まるという現象には、日米の文化差がないと言える。この結果は、甘えの概念をもたない文化でも、甘えが対人関係を促進させること示す。

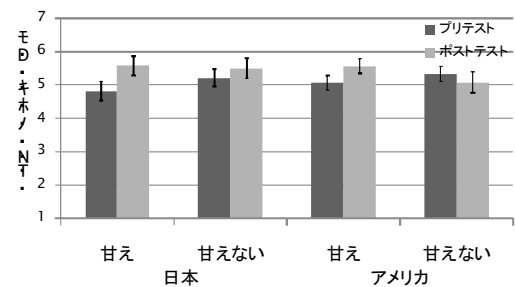


図3 日米の甘え条件と甘えない条件におけるプリテストとポストテストでのサクラに対する好意

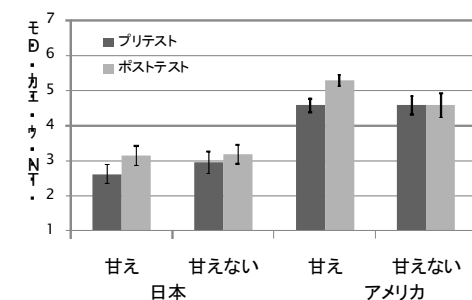


図4 日米の甘え条件と甘えない条件におけるプリテストとポストテストでのサクラから感じる好意

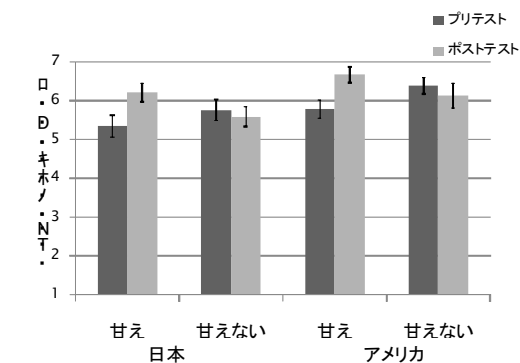


図5 日米の甘え条件と甘えない条件におけるプリテストとポストテストでのサクラに対する好印象

なお、サクラが甘える条件でサクラに対する好意が上昇するのを説明する変数として、日本ではサクラに対する印象が媒介し、アメリカでは、サクラからの好意が媒介することが明らかになった（図6と図7）。

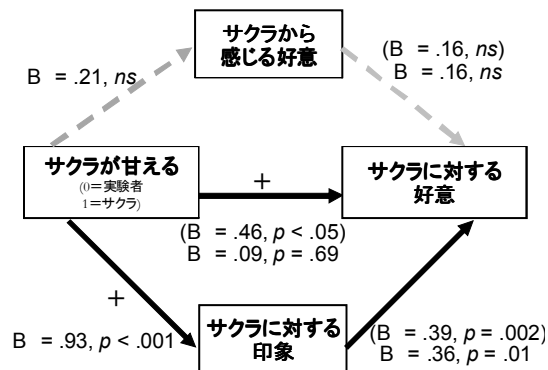


図6 甘え条件でのサクラに対する好意の増加を説明する媒介モデル（日本）

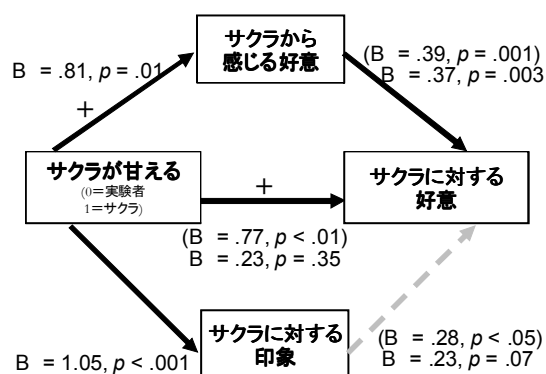


図7 甘え条件でのサクラに対する好意の増加を説明する媒介モデル（アメリカ）

「甘え」という言葉も概念もないアメリカ文化においても、日本と同様に、甘えが対人関係を促進しうる効果をもつことが明らかになった。同時に、甘える相手に対してなぜ好意を持つかという点で、文化差も見られた。今後は、関係性の親しさやコントロール感などを実験で操作し、どのような条件で甘えが関係性を促進するのかを明らかにしていく必要があるだろう。また、甘えの文化差についても、さらなる検討が必要である。

なお、韓国でも追試を行う予定であったが、事前の質問紙実験では、韓国人は日本人よりも甘えられることを喜ぶ傾向があり、甘えの負担が大きければ大きいほどうれしく感じる、という日本と異なる予想外の結果が得られたため、まだ韓国での追試は行っていない。今後は、日韓の文化差についても追究してい

く必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計2件）

①Yu Niiya, Jennifer Crocker, Dominik Mischkowski, Compassionate goals predict better relationships in Japan even after controlling for interdependent self-construal, Society for Personality and Social Psychology, 2010 January 29, Riviera Hotel, Las Vegas, USA.

②新谷優、親しさの証として喜ばれる大人の甘え、日本社会心理学会・日本グループ・ダイナミクス学会合同大会、2009年10月11日、大阪大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新谷 優 (NIIYA YU)

法政大学・グローバル教養学部・助教

研究者番号：20511281

(2) 研究分担者

該当者なし

(3) 連携研究者

該当者なし